様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 ２２ 年 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３７７０３
研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008 ～ 2009
課題番号：２０８２００６３
研究課題名（和文）沖縄津堅島方言における格助詞の複合形および呼応的表現の研究

研究課題名（英文）A study of the compound form of case particles and their collocative relationships in the dialect of Tsuken island in Okinawa

研究代表者
又吉　里美（MATAYOSHI　SATOMI）
志學館大学・人間関係学部・講師
研究者番号：60513364

研究成果の概要（和文）：本研究は格助詞と格助詞との関係に注目して格助詞の意味機能をより詳細に記述したものである。さらに承接関係や意味機能の発達過程を考察することができた。主な成果は以下の２点である。1)津堅島方言では、格助詞の複合形がみられる。これは格助詞に承接する形態が関わっていることが明らかになった。2)格助詞の呼応的表現の形態に注目することで、格助詞の意味機能の発達過程のメカニズムを分析考察することができた。

研究成果の概要（英文）：This study is a detailed description of the semantic functions of case particles, focusing on the relationship between case particles. The following two points are the main results. 1)There is a compound form of case particles in the Tsuken Island dialect. It has become clear that the form which joins on to case particles is involved. 2) Through paying attention to the form of collocative relations of the case particles, it was possible to analyze the mechanism of the developmental process of the semantic functions of the case particles.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	760,000	228,000	988,000
２００９年度	620,000	186,000	806,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1380,000	414,000	1794,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：国語学、方言学、琉球方言、津堅島方言、格助詞

１．研究開始当初の背景

(1)　方言研究の意義

世界には 6000 の言語があり、今世紀中に 3000 が消滅すると言われている。消滅の危機に瀕した言語に沖縄地方の方言がある。方言話者の減少は琉球方言にとって危機的な状況であると言える。

方言の衰退にはいくつかの要因が考えられる。①標準語化の加速②家族構成の変化などである。①については、まず、標準語教育が挙げられる。地方における標準語教育の徹底は戦後直後まで厳しく行われ、方言札などの使用は老齢になってまでも記憶に残るほどである。しかし、昨今の標準語化を推し進めているのは、教育はもとより情報伝達手段の変化にあるといえる。テレビ、ラジオは言うまでもなく、インターネットが普及し、言語の伝播の様相は大きく変化し、そのスピー

ドも増している。このような社会的変化の中、家族構成も変化してきた。いわゆる核家族化である。また、母子家庭、父子家庭も増加している。さらにいえば、結婚する男女が異なる出身地であることも多くなってきている。こうした家族構成の変化が方言の衰退へつながっているとも考えられる。さらに、離島となる人口の問題が加わる。沖縄は多くの離島を持つが、多くの島々で人口減少が進んでいる。人口の減少は方言の衰退を加速させる。このような方言の継承の危機的状況にあって、現在すべきことは一カ所でも多くの地域の方言の実態を記述しておくことである。

本研究の対象地域である津堅島も人口減などで無人島化の危機にある。すなわち、津堅島方言は、その全体像および詳細が明らかにされないまま、消滅しようとしているのである。早急に津堅島方言を調査し、全体像を明らかにしなければならないのである。

(2)　津堅島方言

津堅島方言の研究は、琉球方言を解明する手がかりの一つになり得ると考える。たとえば、音声には古代日本語にあったと言われる「p 音」が保持されている。「ハナ」は［pana］、「フネ」は［puɲi］といったようにハ行音に p 音が現れる。古代日本語および琉球方言の研究の手がかりを有していると考える。

また、文法面においても標準日本語とは異なる部分も多く指摘できる。たとえば、道具を表す格助詞「デ」にあたるものとして、津堅島方言では、［ɕi］［kara］［ŋka］が挙げられる。これらには使い分けが見られる。［kara］は移動手段に関するものを表す時に用いられる。［ŋka］事物の変化手段に関わるもののうち、容積や空間を要するものを表す時に用いられる。それ以外は［ɕi］が用いられる。たとえば、以下のような使用例が見られる。

1. mmuɲijana:biŋka ɲiɕi mmu katutanro:. ／ンムニヤナービンカ ニシ ンム カトゥタンロー. ／芋煮る鍋で煮て、芋食べていたよ。
2. ʥippuŋgurai ʥiteẽɕakara ikuru umaŋka pamanu anʧuigate. ／ジップングライ ジテンシャカラ イクル ウマンカ パマヌ アンチュイガテ. ／十分くらい自転車で行ったそこに浜があるというがね。
3. ɲiɕi ɲʥine: paigwa:ɕi paŋkumba:te. ／ニシ ンジネー パイグヮーシ パンクンバーテ. ／熱（が）出た時には、針で（頭にあなを）あけるわけ。

また、［kara］［ŋka］の代替として用いられることもある。つまり、上記の①、②の例で［mmuɲijana:biŋka］は、［mmuɲijana:biɕi］、［ʥiteẽɕakara］は［ʥiteẽɕaɕi］と言い換えることができるのである。このような使い分けは首里方言をはじめとする琉球諸方言ではまだ指摘されていないが、琉球方言の文法的特徴をとらえたり津堅島方言とその他の琉球諸方言との差異を考えたりする上でも重要なデータであると言える。

(3)　方言文法の研究

方言文法の研究の意義は大きく 2 点あると考える。①方言研究における文法研究を活性化させること。②方言文法から日本語文法をとらえ直すこと。以上の 2 点である。

①については、方言においても文法研究を積極的に進める必要があるからだ。方言の研究は以前から盛んに行われ、音韻論的研究、語彙論的研究、形態論的研究において、一定の成果をあげている。特に琉球方言においても音韻論的研究が盛んになされてきた、伊波普猷は「P 音考」をはじめとする琉球諸方言の音韻を研究し、中本正智は琉球方言音韻史の解明に挑んだ。その他、服部四郎、上村幸雄、柴田武などの研究者らにより琉球方言はいくどとなく取り上げられ、琉球方言研究の基礎的な研究が積み重ねられてきた。しかし、文法研究は音韻論的研究や語彙論的研究に比べて少ない。また、多くの文法研究が動詞の活用をまとめたものや助詞の意味・用法の記述などいわゆる国文法をベースにするものが大半である。形態論的な研究がなされてきた一方で、構文論的な研究が遅れていたが、昨今、構文論的な研究が盛んになっている。本研究も、構文論的な立場からの文法研究を目指すものである。

②については、方言から日本語を考えることに関連する。先に津堅島方言での格助詞の使い分けで見たように、方言では、標準日本語とは異なった文法体系を持つことが分かる。しかし、一方で、近接する地域方言との関連が見いだせることも多い。たとえば、移動手段を表す［kara］は九州方言でも見られるなど、琉球方言と九州方言との関連を考える手がかりともなり得る。また、日本語史との関連も考えられる。たとえば、『日本語文典』には「舟から参つた」の例が見え、さらに古くは、「つぎねふ山城道を他夫の馬より行くに己夫し歩より行けばみるごとにねのみし泣かゆ」（万葉集、巻 13）と「から」のかわりに「より」が見える。通時的考察を方言を踏まえて行うことで明確になることも多い。つまり、方言の文法から日本語の文法の特性や変遷を考えることができるのである。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の４つである。

(1)沖縄津堅島方言の格助詞の意味機能について明らかにする。

(2)「格助詞＋格助詞」の観点を取り入れ、個々の格助詞の意味機能のみならず、複合形の格助詞の意味機能および格助詞の相互関係を明らかにする。

(3)沖縄津堅島方言の複合形格助詞の機能を構文論的立場および国語史的見地から明らかにする。

(4)呼応的関係やある一定のまとまりを作る格助詞の機能を明らかにし、沖縄津堅島方言における格助詞相互の関係を整理する。

３．研究の方法

調査方法としては、自然会話の聞き取りおよび録音を行う。それは必ずしも効率のよい方法ではないが、確実性という点においては自然会話の聞き取りおよび録音に及ぶものはないと考える。それは以下のような指摘からも明らかである。

調査は気苦労が多くて、はかどりが悪い。しかし、お邪魔したのに、却って感謝され、土産物までもらって帰ることなども少なくない。ついつい長居してしまい、泊まっていけと言われることだってある。辞去するタイミングは、いつも私の気遣うところである。このような人間的な方言調査を重ねてきた者にとって、経費も時間も心までも簡略にした大量通信調査は、魅力的であった。何度も試してみた。しかし、通信調査と臨地調査の結果とを比較してみると、建前と本音との差がはっきり現れる。そういうものなのだということを知った上で両方をうまく使い分けていけばよいのである。…省略…誠意のある出会いをしなくては、方言資料に地域の実状が反映されないからである。
江端義夫（2002）「人間不在の方言学からの脱皮」『21 世紀の方言学』（国書刊行会）p. 280

特に、「助詞」は一定の概念を伴っているとは言えず、「助詞」のみの調査は不可能で、必ず文表現の中で捉えなければならないものである。また、これまで調査を行ってきた経験から、ある「助詞」を意図的に聞きだそうとすると、話者は混乱し、適切な方言資料とはならない。いくつかの助詞の代替が可能な場合、話者による「揺れ」や「迷い」が生じる。たとえば、手段表示機能を持つ［ŋka］は、事物の変化手段に関わるもののうち、容積や空間を要するものを表す時に用いられる。また、［ɕi］を［ŋka］の代わりに使うこともできるが、自然会話では助詞［ŋka］を使うのが通例なのである。こういったことがありうるので、用例を収集するためには、できるだけ自然会話の中から選ぶようにした。

４．研究成果

(1)津堅島方言の格助詞複合形の問題点

格助詞の重複は構文論的にその形態が現れにくい。多くの文法書が重複形がないことを説く。

この類の助詞（注：格助詞のこと）相互は、同じ文節中で重なる事は無い」（橋本進吉『助詞・助動詞の研究』p. 55）

一般に、１つの名詞につく格助詞は１つである。複数の格助詞がつくことは基本的にない。１つの名詞に複数の格助詞がつくと、その名詞が述語に対してどのような意味関係をもっているのか特定できなくなるからである。（日本語記述文法研究会『現代日本部文法２』くろしお出版 p. 7）

しかし、格助詞の接続がまったく不可能ではなく、「から」「まで」「～から～まで」のような範囲を表す形式などにおいてその接続が可能となる。

・その病院に行くには、駅からが近い。
・東京から大阪までを鈍行で９時間かけて移動する。（日本語記述文法研究会『現代日本部文法２』くろしお出版 p. 7）

このような文中における接続形式などから、「から」「まで」はしばしば副助詞として扱われることがある。

津堅島方言においても［mari］には上記のような複合形が見られる。

1. ɕitɕigwatsumarindʑi ɕiharaija uwatutaiga.
シチガツマリンジ　シハライヤ　ウワトゥタイガ．／七月までで、支払いは終わっていたけど。

ところで、標準日本語で「帰りにコーヒーを飲んできた」と使われるようなものがある。「帰りにコーヒー飲んできた」と「帰ってくる時にコーヒーを飲んできた」や「食後にコーヒーを飲む」とはどう違うのであろうか。「に」に接続する語を見ると「帰り」「時」「食後」とあり、一見、「帰り」は動詞に見えるものの、名詞化した語と捉えることもできる。そうすると、語形態上は「に」は時を表す格助詞として捉えられる。似たような表現は津堅島方言においても見える。

2. ki:ɲi attɕisuɲtɕuɴ.／キーニ　アッチスン

チュン．／来る時に歩いて来るって。

また、津堅島方言には［ɲikara］の形態が見える。この［ɲikara］は標準語では接続が不可能となる。このような複合形において、［ɲi］は、格助詞的なものなのであろうか。それとも副助詞化の過程のものなのかが問題となる。

(2)津堅島方言の格助詞複合形［ɲikara］

標準日本語では「ニ＋カラ」の形態はとれない。また、津堅島方言において、承接するものが名詞の場合には［ɲikara］の形式は見られない。このことから考えると、津堅島方言においても、標準日本語と同様、［ɲi］ ＋［kara］ の形式はとれないということができる。しかし、［ɲikara］の形式は、「動詞活用形＋ɲi ＋kara」 において接続が可能となる。使用例は以下のとおりである。

3. wanu warabisuiɲikara anu ʧotto nekozejatan.／ワヌ ワラビスイニカラ アヌ チョット ネコゼヤタン．／私はこどもしていた時から（子どもの時から）、あの、ちょっと猫背だった。
4. ɕimaŋka uiɲikara paruha:rujatan.／シマンカ ウイニカラ パルハールヤタン．／島にいる時から畑仕事する人だった（畑仕事していた）。
5. waka:ɲɲikara magahattamun.／ワカーッニカラ マガハッタン．／若い時から大きかった。

ところで、文語では活用する語（準体言）に続くことが指摘されている。「月のいとあかきに、川を渡れば（月がとても明るいときに川を渡れば）」（枕草子）「いと暗きに来けり（たいそう暗い時に来た）」（伊勢物語）などの使用例が見える。これらは、活用する語の連体形に続く例であるが、活用する語に付き、「～時に」と時を表すものとして機能している点上記の津堅島方言の例と一致する。

以上の文語の例から考えると、津堅島方言の［ɲi］は、時を表す機能において、活用語に続く形式を残したものといえる。さらに、［ɲi］に「～時に」という意味を付加させ、準体助詞的な機能を有したことで［kara］への接続が可能になったものと考えられる。

(3)津堅島方言における格助詞の呼応関係

津堅島方言の格助詞のうち、特に呼応関係のあるものとして［～kara～mari］［～kara～ɕi］がある。［～kara～mari］は標準日本語の「～カラ～マデ」と同じく、時や空間などの範囲を表す。

6. iʧai kisai he:barakarakinwammari.／イチャイ キサイ ヘーバラカラ キンワンマリ．／行ったり来たり、南風原から金武湾まで。

7. jozikara gozimarijagutujo. ju:bannu nu:kui ʧumbiɕi:kara.／ヨジカラゴジマリヤグトゥヨ．／（式は）４時から５時までだからね。夕版はいろいろ準備してから（出た）。

一方、［～kara～ɕi］は標準日本語の「～カラ～へ」に相当するもので、移動の起点と方向を表す。

8. pe:barakara umaɕi ido:ɕi kiɕikara gozu:gokanen naru.／ペーバラカラ ウマシ イドーシ キシカラ ゴジューゴカネン ナル．／南風原からここへ移動してきてから、55 年になる。

9. pennakara umaɕi ikutamba:jo . jamagusukuɕiru.／ペンナカラ ウマシ イクタンバーヨ．ヤマグスクシル．／辺名からここへ行っていたわけよ。山城へぞ。

⑥や⑦は空間や時間の範囲を表し、その起点が終点が［kara］、終点が［mari］で表されている。一方、⑧、⑨は移動の起点と方向が示されているが、方向はすなわち移動の終点と重なっている。

(4)呼応関係［～kara～ɕi］

津堅島方言の［～kara～ɕi］には起点と方向を表示する機能の他、列挙表示の機能がある。「累加列挙型」といわれる機能で、何らかの共通性をもった同じグループに属する要素を次々に列挙していくものである。例は以下のとおりである。

10. hanako:kara jo:koɕi kunuja:ɲʧi sudati.／ハナコーカラ ヨーコシ クヌヤーンジスダティ。／ハナコからヨウコから、この家で育って。
11. hanakokara mata jo:koɕijo ta… taro:nupanaɕi kikantaɲʧijo.／ハナコカラ マタ ヨーコシヨ タ… タローヌパナシ キカンタンチヨ／ハナコからまたヨウコからよ、タ…、タロウの話、聞かなかったと言ってね。

12. saãe:kara junioŋkara seikjo:ɕi ikuiga unumisenakante muru urikirejamba:jo.／サンエーカラ ユニオンカラ セキョーシ イクイガ ウヌミセナカンテ ムル ウリキレヤンバーヨ．／サンエーから、ユニオンから、生協から（まで）行くが、この

（これらの）店などは（赤饅頭は）全部売り切れているわけよ。

この「累加列挙型」の機能を持つものは、標準日本語では「に」がその役割を担っている。たとえば「佐藤に鈴木に田中がやってきた」「日本三景は、松嶋に天橋立に宮島だ」といったように、全部列挙型に近い機能として働く。ただ、標準日本語では、最後に列挙したものには「に」は接続せず、述語と共起関係を結ぶ助詞が選択されることが多い。「佐藤に鈴木に田中がやってきた」において、「佐藤」「鈴木」には列挙を表示する「に」が承接するが、最後の「田中」には「やってきた」の述語との格関係をむすぶ「が」が承接するといった具合になる。

一方、津堅島方言では、列挙の終点マークとして必ず［ɕi］が取られるが、そのあとには無助詞（例文 10）もしくは間投助詞（例文 11）のようなものがはさまれることが多い。例文 12 の場合は、［ɕi］が列挙の終点マーカーであると同時に、［ɕi］が「行く」との格関係にあり、方向を表示している機能である。

(5)格助詞［ɕi］の機能

格助詞［ɕi］は基本的には、「行く」や「来る」などの移動に関わる動詞と格関係を作り、移動の方向を表示する機能として働く。

13.ʔaba umiɕi ikuɲtɕi i:tamunaga.／ッアバ ウミシ　イクンチ　イータムナガ．／あら、海に行くって言っていたじゃない。

しかし、「方向」を表示する機能の他に［kara］と呼応関係を作ることで、［kara］の「起点」表示と呼応することで［ɕi］が「終点」の機能を強めたと考えられる。その結果、列挙表示の機能において、［kara］の列挙表示に対して、［ɕi］が列挙の終点をマークする機能が発達したものと考えられる。

(6)まとめ

以上のことから津堅島方言の格助詞の機能の発達パターンとして２つのことが考えられる。

一つは、文語に見られるような助詞の古い機能をより強化させるパターンである。すなわち、［ɲikara］の［ɲi］に見られるものである。動詞や形容詞の活用語に接続する形態を保持し、［ɲi］に「～時に」という意味機能を強化させているのである。

二つは、新たな意味機能を発生させるパターンである。すなわち、［ɕi］は［kara］と呼応関係ととることにより「終点」表示の機能が確立させたといえる。もともと「方向」表示の機能として働いていた［ɕi］は、「方向」表示とともに潜在的に移動の「終点」表示の機能を有していたと考えられる。それが、［kara］と呼応関係ととることで「終点」表示機能を強化させ、結果、［～kara～ɕi］の形態で列挙表示という新たな機能を獲得した。特に、［～kara～ɕi］は列挙表示の「起点マーカー」「終点マーカー」という機能として働いたことから、［～kara～ɕi］は列挙表示の中でも、「累加列挙型」の型となっている。

このような格助詞の機能の発達パターンは、他の琉球諸方言でも見出すことが可能かもしれない。また、琉球諸方言だけでなく、日本諸方言でも分析考察することにより、日本語格助詞の発達過程を考える手がかりになるのではないかと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Satomi MATAYOSHI, THE MEANING FUNCTION OF THE CASE PARTICLE ʃi IN THE TSUKEN ISLAND DIALECT OF JAPANESE CONSIDERED FROM THE PERSPECTIVE OF COLLOCATIVE RELATIONS, SCN （Slavia Centralis [2010]), 査読有, 2010, vol.1, 162-171

〔学会発表〕（計１件）

① Satomi MATAYOSHI, THE MEANING FUNCTION OF THE CASE PARTICLE［ʃi］CONSIDERED FROM THE PERSPECTIVE OF COLLOCATIVE RELATIONS, 6th SIDG Congresss, 2009 年９月 15 日, Unniversity of Mariboru （Slovenija)

６．研究組織

(1)研究代表者

又吉　里美（MATAYOSHI　SATOMI）
志學館大学・人間関係学部・講師
研究者番号：60513364